Ｅ（イー）通信

エルフォルク

２０２６年４月号

２０１９年４月３０日は「平成」から「令和」へと改元した日。低成長や災害が続いた「失われた 30 年」を経て『万葉集』の梅の花に希望を託した新元号が始まりました。理想の世とは言い難い世界情勢ですが、冬を耐え忍んで花開く梅のように、一人ひとりが明日を信じる心はこれからもずっと大切に持ち続けたいですね。

2026 年　間もなく開幕！

春寒も緩みはじめ、ようやく過ごしやすい気候となってまいりました。　川沿いの河津桜も散りはじめ、次はソメイヨシノの開花を楽しみに日々過ごしております。　朝晩の冷え込みや花粉には気を付け、健康で行楽シーズンを満喫しましょう！

さて、我らがカープ。　毎年のように「今年こそは」と期待させておいて、気付けばファンが胃薬を常備する羽目になる、そんな“期待と不安のジェットコースター球団”。

戦力を冷静に見れば、先発は優秀、野手は未完成、リリーフはほぼ工事中、これが現実だ。

まず先発は豪華だ。　床田と森下という二枚看板がいて、常廣や玉村、高といった若手もそろう。　ここだけ切り取れば「優勝候補」と言っても怒られない。　しかしカープは、先発が良くても勝てるとは限らないという残酷な真実を何度も見せてきた。　昨季なんて、床田が７回１失点で降りた瞬間に、ファンが「ここからが本番だ…」と覚悟を決める地獄のような展開が常態化していた。　今季もリリーフが改善しなければ、先発が試合を作りリリーフが試合を壊すという伝統芸が続く。

打線に目を向ければ、ここはもう“４番ガチャ”である。　小園は素晴らしいし、板倉も本来はもっと打てるはずだ。　末包はロマンの塊で、モンテロは当たれば神。　ただし、当たれば、である。カープの外国人野手は、当たれば伝説、外れれば１年で消えるという極端な歴史を持つ。　モンテロが40発打つ未来もあれば、「明るくて良い人だったね」で終わる未来も普通にある。　末包も怪我さえなければ30発打てるが、怪我をしないという最重要スキルがまだ未習得。　つまり、４番が決まらなければ今年も３点台の貧打線が続く可能性が高い。

そして最大の問題がリリーフだ。　栗林が先発に回り、勝ちパターンは島内と森浦くらい。　去年のブルペンは「火消し役が火をつける」という悪夢のような展開が多かった。　今年は石井コーチの改革に期待するしかないが、正直、先発が７回まで投げないと勝てないチームという構図はしばらく続きそうだ。　結局のところ、2026年のカープは“綱渡り野球”で戦うしかない。　先発が試合を作り、打線がそこそこ点を取り、リリーフがなんとか耐える。　そんなファンの寿命を確実に削る野球が今年も続く。

ただし、若手が一人でも覚醒すれば、一気に景色が変わる。　小園がタイトル争いに絡み、末包かモンテロが30発打ち、常廣がローテを守れば、普通に優勝争いできるポテンシャルはある。　逆に言えば、誰も覚醒しなければBクラスはほぼ確定。　夢もあるが不安も大きい、そんな“カープらしいシーズン”がまた始まろうとしている。

間もなく開幕！　頑張れカープ！！

エルフォルクはあなたを　そしてカープを　全力応援致します！

裏面もご覧ください。